繪本豐臣勲功記

初編

貳

繪本豊臣勲功記初編巻之二

目録

日吉丸仕私下家号義吉

附 親熟武義

中村茂右郎強後松下軍

附 両家競隊

羽吉郎高吉初戦打伊羽
附救主危急
今川小条於冨士野和睦
附蘆吉歩志

繪本豊臣勲功記初編巻之二

江戸　櫻澤堂山　編輯

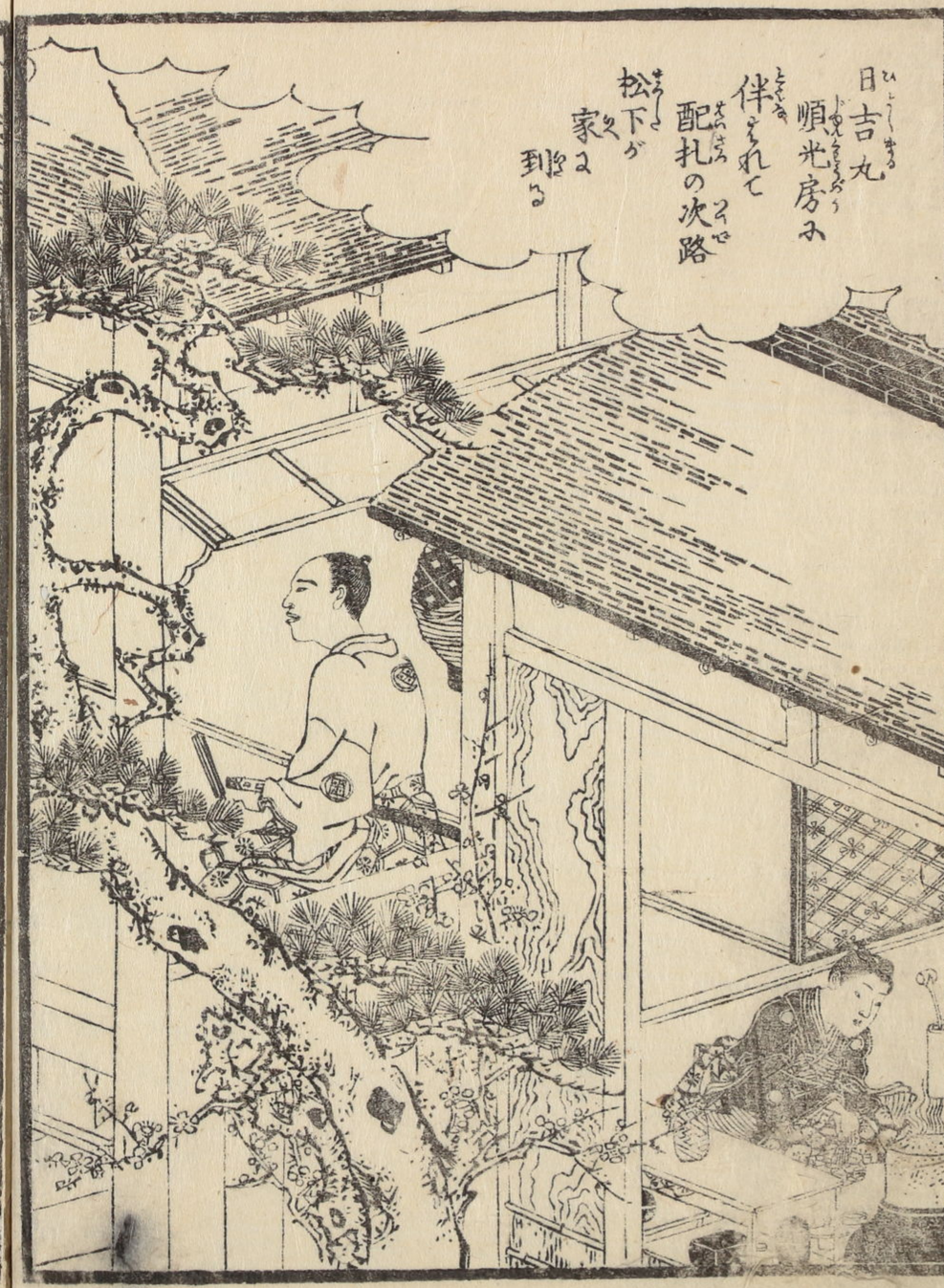
日吉丸仕松下家号藤吉郎　観熟武藝

萬事心と用ゆる朐ハ。飛花落葉も技藝とこそ。然べ中村日吉丸ハ順光房ふ従て。東國へ起きゝべ。五郎作ゝ安途せゝと。母ハ郡て往涯と。案ト續けく東ふ西ふ。発旅ゝる當日より。只選えきを日と算へ。待徑めるハ愚ふ倍つれど。その親らて児と思ゝハ。愈推慰て斯こそあれ。然ども養父統阿弥ハ。日吉が緯とは外へ出て更ふ善悪謂ねべ。母の於仲ハ底責と紐らを。剰その緯ふや思ひけん。統阿弥ふうち對ひ。喃大良人ふハ日吉が緯。斯すを万き華止しゝく。持て剰しゆる支のゝ有ふ。異見と為てハ賜たらねと。辞座ふ怨ずれ。

就阿孫於仲ふ語て謂ふ。咲くその詞へ理なれど。日吉丸へ尋常の
児輩と全く類ふあらず。されー駒の奇瑞といひ。亦生長の動靜へ
氣隨なれども悪事と做さず。父祖なる孫助國吉が。大願の直て祖
所傳へ。偖その願望日吉が身ふ。應する徴のあらんふ。俺們ごと
きが仂ぎ。教訓しつとも何ん。天神地祇の擁護まり。奈何
ある深山幽谿ふ。棄安べて失るく。猪狼の類まで。却て渠が輔
とあるべし。或い海波ふ漂ふとも。鯨鯢蛟龍鼈と振ひ。鱗と張て
護るべし。斯頃意ことやある。我方僅日吉が身と占るに。阿姑が
産ふ臨む日の。瑞相不思議あるのみ。霊夢ふ感て懐妊せ
徴。絶ふこれと聞て。心決して疑がなふ。阿姑へ厭と眼看。示現
蒙る身とあるく。早くも在るあり。如ど這徴叶賢他ふ

漏ーあるべ。潛然ふ教訓しれば。於仲も実ふもと思直ー。以後
嘗て日吉が徴。頃ある氣色いありけり。然るふ就阿孫年老て。起
居も自在あらざれば。婚と迎くく家と讓り。身と安樂ふ過さんと。
海東郡砂子村なる。長尾某が子と將て。日吉丸が妻なるあり。計歳
十七ふ長ぬるが。柯人として此ふ倚偶ー。孫助吉房と号らせり。
右馬允久吉と号ー（從五位下て武義守ふ任ぜ一路法印則是なり吉房が生國を高根村或い春多郡大高村とも諸本の誤歟）這又話い図つ。茲ふ中村
日吉丸い。順光房の倶とし。三河路過て遠江と。道と渉ふ隅も
なく。標と配りて行向く。城主領主の分限より。山川郊野の地理と考。
城邑村市の人員まで。多少増減とよく察ー。要涯進退の図を
量て。且い貴賤の品と料簡。指号と待て配札の。大ふとて格別されば。
順光房い殊の外。調賣ぐりて悦びつも。日と経て濱名ふ到ぬ。山所へ

日吉丸
順光房ゐ
伴まれて
配扎の次路
松下が
家々
到る



今川の領地にて。名達る勇士駿きが中に。濱名の地あり軍學師。松下源太左衛門尉長則（加藤清正の父）住しゐる。是い今川の舊臣なり。軍略兵法に雙なければ。謀主となりて其禄と。千五百貫賜はれ。於るに多賀の順光房。這松下に年来より。師檀の好情なり。比に来て両三日。行疲と休めり。滞留せり。這館の奴僕婢嫗們。日吉丸と聯に見て行。猿に似たりと嘲笑ひ。散るに集りそれのことを。罵讃稱して喧きが。加藤清正の綱快听取。奥ゐる緯に思ひしあり。常袁廳に招て菓子など賜へ。その相貌と沈觀をし。庸人ならじと。父に語るば。長則も又召進し。何國の者ぞと尋るに。尾張の國なる愛智郡。中村なりと答る音声。爽にして大音なり。長則荐日吉に朝ひ。子我館に留りて。武士となるべき望ありやと。問はそ思らば雀躍し。是年来の所望なれば。是非に給仕を願ひ。然りとのことも順光房。猶巡行の半途なれば。此に留りて。明天より供に事爾ん。長くもあらぬ旅なると。巡てらば荐び参り。而して御恩を受べきまと。累も賢き應説に。長則父子感佩の。さらば克く努力て后。歸来れと詞と約し。順光房に扈従て。遂に駿河へ赴きけるが。日吉に猶も心と用ひ。今川家なる大身小身。残らず巡て家風と料簡。函嶺と越つ伊豆相摸。免符の國と巡配し尽し。春過夏に移る頃。我國近江へ扯返せ。而して濱名に帰途なれば。荐び松下が家に至り。日吉が緯と繰く憑を順光房に國へ帰りぬ。斯て松下長則に。日吉と家に留置。之綱が舎弟友次郎とのこる。此年九歳に長ぬるあり。傳もる者の病に

犯され 暉とうて在ざりしうべ。彼友次郎が傳ふる。心信せず遊を
せうう。諸木友次郎と以て之郷の子とせり十四の
之郷ふ ゆゑ九才の男子あらんや 原来日吉が性質。辯舌殊ふ達す
るれば。累夜の世話戯談。鬼と語り佛と説。月日の方ふ国巡
草木黄ふる嵩嶽。蝦蟇の足と蛇ふ添。羊の角と兎額ふ載め
最おもしろふ門語るふ。姫輩まで叡ふ轉へ。能者ありと愛憐ず。
然るふ主長則ハ。壯士を召聚め。太刀或い鎗合せ。夜ハ孫呉の兵
書と講ず。篤實とのを施し。士と養ふ辨と怠りなければ。日士ロハ
これふ望満て。晝ハ終日講武場の。隅ふ跼ひ見物ず。夜ハ亞
廳ふ導て。軍錄兵志の講義と聞こと。滋味と嗜むふ異ずゑ。
寸陰の間も軽んじ。心を烈し 憚ぶちふ。日吉九年長て十八歳
日結九十八才ハ 天文廿一年ず ゆゑ元服と加へられけるゑ。序ありて日吉九とも。角髪せうせて男ふ
成し 藤吉郎と号らせけるゑ。厥證として刀一口。是と貶へて役とさへ。
掌履ふ進ませうう。素より藤吉郎剛膽ずれば。亦ゆや刀の悪きと
嫌ひ。縱令騨履を掌身ふも。這般の刀と帯して。要緊の秋の用
ふハ成らず。愈此鋭味よき刀を。賜らばやと咳しと朋輩聞て大
ふ憎む。主人の貶へ刀とゑ何ふ足る緯やうる。いと不禮ぎ
る論ぞと。叱責まゑ藤吉郎。不禮過者と叱りゆゑる。騨履掌
る身ハ主人ふ離ゑぞ 影と響の像く ず。萬一事の変ありうゑ。
主人と扶て防禦と做さんふ。利鈍刀と帯せぎれば。其詮嘗こ
うべし。と理責て言噤ると。之綱廳隔ふこれと聞。實ふ理ずる
言條ず。渠が望とと稱へさせんと角平日ふ帯しる。秘蔵の刀と

既へければ。藤吉郎遣推頂き。雀躍して歓びて。之郷に朝ひ
謂ける。人元服と加へる時。實名も共に付ることやら。父よく
是と語りふき。其も亦何とかいふ實名附て願たやと 所て之郷
厩もいらん。文字に望をや有と問へば。然侍吾父は昌吉と号す
るれば其文字に。應ぎる名をそ 聴へ。然らば父の一字に據り
高吉と号るべし。汝が産き地なれば中村とのて姓と為よとて。
中村藤吉郎高吉と。姓名剛て熟備せり。手の長るに隨て。愈
増く懈りなく。軍学兵法に耳目を列す。日々練武場に伺候
して。飲食と忘れ見物せり。茲に門嶌宇一といふ。松下の門人にな
ける。性質血氣の揣男にて。常日の起居言謂ざま傍に人多き
若し。連日に中村藤吉が。錬兵場へ来て見物をると。坐に揺て

謂ける。這は一方ならざる道場。子輩の投る場ならむ。快き
退よとでし又。武藝と覚る心やある。有なら来れ教へふまん。
些は痛き面苦しき面も。忍び堪る骨なければ。藝道錬達な
がらと。意根悪く言盤れば。藤吉郎もおのれと懐へど。其は顔色
に露さぬ。宇一に向て。辞と輭げ。錬武做さるに觀るならむ。這
道場に在るうもに。多何にも心健ふし。壽るに思ふ故。日く見
物しつるなりと。いふに嶋。厩計に思て。学て昇達速うるべし。
一刀我と刀合て。試せと木太刀と差付。強付とても這方は車下
なし。いろく貴公に及んや。刀合こそは敵されこと。辞退すれともい
うる容なし。門嶌いろく弱味に乗し。斯は臆病なる根性なる斯な
る輩は這場に置れず。疾退去と利者られ。藤吉莞爾と笑

藤吉郎演習場ふ
迫せられて遂ま
川島宇市が
慢額を打碎く

ながら。課せのごとく日くふ。見物もるも修行のごとく。輸さればとて羞
みもならぜ。厥まをふ勧めるものから。足下と太刀合稟さんが萬一
拙者が持てる木刀。對人の顔ふ中りなば。這上もなきふ禮なり厥故
容捨を睇みて。听て川嶋大ふ怒り。憎き猿面が一言なる。自己が
無技を顧さんと他を下涂蠅類め。先骨肉を飛してくるん。思知れ
やといふ采ふ。木刀推掌起向ふ。藤吉ふ今ハ辞もるふ道なく。こ禮
汚免と木刀掻掌。翻然と錬武場ふ跳投。川島宇一ハ藤吉と。
唯一撲と雙立ふ。宇一ハ勝ちて大漢。藤吉郎ハ他族ふ外ふて
標立繻男なれば。十指十目藤吉こそ。なもなく宇一ふ撲殺られ
憐を命も危くらあと。汗を流して看護ち。宇一ハ猪声ー藤
吉が。眉間を臨て打投太刀夫心得ちと丁地受止。退ぞもな

の飜ると看えしが。川島宇一が目の下と。斜面ふ発止と撲。うこれて
宇一ハ眼中眩く。怯むところと着投て。持る木刀とうち落し。勝負
いくふと喚ーくば。傍の武士一齋ふ。ももえび声と抜起て。藤吉ーくう
と誉すける。川島大ふ面皮と泥て。消ふけれど木刀と拾ひ我慢
の拳和らがで。今一遭と怒立蒐ると。藤吉顧ーくと打笑ひ。甚上ふも
亦癇點なば。乳の毒ありと言棄て。主人の許へ退帰りぬ川嶋宇一
ハ瞋懐ながら。家ふ帰て所労と言立。他ふ面會せずしが厥ふ
知らぜ松下長則。夜毎くの軍講ふ。宇一が出席せずると訝り。何
ゆえ汝参と聴者ふ問ふと。門弟係も頑てより。宇一と憎在ちー緯
ゆえ。藤吉郎と較量の預相。告ると听て長則怪え。且驚て云ける
ぞ。斯ハ心得ぬ言ふこそ。宇一ハふ剛き修錬の壮士。藤吉いくそう

演ぶべけんや。此言構て試ーるらむ。根ふ葉ふ枯て用人ぞと。亞麿ふ捷
了ー藤吉と。膝下近く招き席。實ふ名ある錬武藝ふて。門嵩宇一と
較量ふー。渠が面へ癡黙さるふや。いつふも主公の尋ふ違えば辞退
もれども諾ふき糸。壊るるー力合て。験と一撻ーるー。斯い奇特
ふる挙止るる。さー我館へ来らぬこ家。学びー輩のありやまる者く
幼稚の甫より。他の錬磨と見物ーて。獨工夫と做るのと。他ふ獨ふ
て力合せーふ。門島大人が敢てありと。听て長則増し感ー。然べ子が
術の浅深。試んふ我自。對人ふ為て一太力合せん。先其打て試
よ藤吉と。木力と與へる起上れば。斯い辱き仕合ぞと。辞る色なく
立對ふ。大張天下と料理する。肝襄見えて驍ー。

中村藤吉郎強従松下軍偏両家競隊

鬼と鬼と觀決もれば外ふ怖るる物いふらーと。中村藤吉郎高吉い
西東と決する律速ふれば。他手老功の長則と力合るれと出一も
臆せも。優ーて凡人ふらざる藤吉 心中ふ深く丹練せー 天真正の
一の手力 鋒鋩く打発る。一上一下の電光石火 見えつ隠るつ 鋒き
剽姚 風ふ狂へる虎豹の像く。雲飜づて龍蛇ふ齊ー右と見
左と撲 肩と避れば裳と掻 掻ふるら八臂もあるや為と 怪ーむ
計の掉きふ。有係の長則心ふ恐怖ー。吁未曾有の掌のうち
る至已勝負と決るふ及ぶ 長則強感佩せると。木力と控て
座ふ整居 列座の諸士ふうち對ひ。各諸ふ聴まく 萬方い是
一心より修練もとりふ金言あり。今眼前藤吉郎が他の錬武と
見るのと較量とせー律さへふく 唯心中ふて了見せー 其兵法ふ

年久〜鍛錬する長則まら會釈ゞき拳方ハ是一心の做ゝこと宇一どゝきがいうゞの淌たん。吁恐ろ〜き少士やと要時も依ゝ讃嘆せり。結て中村藤吉郎濱名ふ在と五手ふ淌ゞど。出陣起軍の沙汰もゝく徒ふ兵武と磨〜のゝ空〜諸居を過〜けるふ明ゝ天文二十三年。相州小田原の城主ある北条左京大夫氏康同嫡子相摸守氏政。今川義元と拵ふ暨び。氏康関東八箇國の軍勢四万五千餘騎。函嶺と駈起駿州へ乱入もる由聞えゝれば。今川方ゝも防戦の準備とゝきんと領分ある駿遠三の軍兵と催促〜つる中ふ就て。松下長則之綱とも 河旗本ふ参陣ゝべ〜と。別書の捩文ふ長則親子出馬の準備嚴ゝり中村藤吉高吉ハ。快との緯と吁ゝも先這遣ハ俱ふ從ひ亟

類の掙做んあと。只管主人へ聘けるゞ。ゝ何ある思慮のありつるゝゝ。長則ゝれと許されゞ。厥緯を用と制止せられ。既明日ハ出陣ゝり。藤吉方僅ハ許容ゝ〜。止まるべきふあらゞと思ひ。兼て懇意ふ〜る鄰家。石堂藤左衛門ゞ方へゝき。是非ハ今般の軍ふ冨と粉ふて掙ゝんと。主人ふ俱を聘ゝとゝ〜ども。那何ある名ゝ召伴ゝ〜ゞ。然りとて徒ふ止りゞ〜。這緯ふ属て心ゝ〜ゞら。光金錆る鎧ふまれ。一領あらゞ請議さ〜。唯管聘ふと聞て石堂。いろゝも議ゝ〜ゝ。霎時待ゝれよと〜ゝ〜。後堂より一具の古鎧を。提来て塵打拂ひ。藤吉郎ゞ家ふ置。最竺美を既へさけれど。倘松下ゞ目と屬て。その鎧〜と問ゝん駒。買討〜と義〜んふ。價賤きふ實〜〜〜。因て古經〜、甲冑を。進上ゝふ〜ゝ〜。系見苦〜

と勝鬨をあげ。次取の軍の音發と。祝しのみもて一軍起て。調酒土
色提素り。機會よく這み栗もあり。一搗せんと樹もつて拾てその采
さしおせば。藤吉郎はうち歡び。幾方なき御諄澤。よき音歌く
高名の。標と足下へ纏頭ふせん。吁厚しこの采ふ。ふて速く鎧ひき
被ぎ。舞別もつて初足亞足。芒鞋緒締うけて。主人の痕と
追さうしふ。松下長則仝之綱。遠くも注ぐ荒井濱の。波うち洗と
過る駒。藤吉郎は走着て。主人の馬ふ驚まる。松下父子へこれ
を看て。その打扮は那ふふせ。鎧は孰ふ借うけ。と問と待得て中
村高吉。已ふ石堂が教へしでく。濱名の市ふて買討ゆ。勝べき
吉辭の鎧と看へ。長則も仝は止やゆ。打休えて出陣せり。熱計ふ
小田原の城主。北条氏康。一子氏政。坂東の兵と雷発せり。天文二十

三年一月中旬。小田原城と発軍ゆ。駿河路當て推進る。府中の
城ゆ。今川治部大輔源義元。今川五郎氏輝早世の子息ゆ。因て舍弟瀬戸禪
則義元ゆ父は　是と聞て大ふ怒ゆ。席と叩て云けるゆ。素小田原の
氏康は。我母北川殿　今川氏親の室の舍兄。伊勢新九郎氏長入道宗瑞　早雲寺と号せ
の孫ゆれば故修理大夫氏親朝臣殿とふ伯父甥ふて。我と渠とふ從弟
別腹の血脈ゆれば。疎うるゆき緣ふあらずや。且亦早雲入道は
京都の奉公衆ゆうしが。漂泊ふて東國へ下向し。身の立国も
ゆうしが。我祖父治部大輔義忠渠と懇で。興國寺駿州富士郡下方庄ふあり の城主ゆ
ゆふ。故殿の加勢ありし故ふ。伊豆相模とも斬隨ゆ。遠ふ関
東八箇國ふ。威と糧うもも。誰ふ加護ゆるゆ。北条氏康その孫と
して故殿の恩義もうち忘と。我采國へ兵と將て。ゆせ朝ふ條。

藤吉郎
鎧を借請
後走
松下が勢に
加わる

不義ならやいなん。を禮ならやいなん。道ふ背ける夷狄の挙止。急き富士川を出陣して。退退んと。敦圉摸書と回して。評議も成さず領國へ支嚴ふ拘うして。駿遠參の惣軍勢。合せて二万五十余騎。段々ふ隊伍を構。富慈川の南へ出陣せり。厥先陣の大將へ。朝比奈備中守泰次（右兵衛大夫兼憲の長男遠州掛川の城主二万六千石と領す）二陣へ飯尾豊後守武茂（遠州引馬野の城主豊後守兼連の一子二万六千石と領す）偖三陣へ總大將。今川治部大輔義元一萬二千の猛騎と牽へ。左右ふ連る勇士ふ。庵原右近大夫忠春。安房守忠胤の三男二千二百石と領す）温井藏人。富永伯耆守。関口越中守。井伊肥後守。江間左京亮等羽翼と成て。次第ふ隊伍を構へて。怒へ松下源太左衛門尉長則。嫡子嘉兵衛尉之綱。着陣せりと言傳へ。是ふ於て。松下父子とふ荷駄奉行と定められる。

偖亦北條氏康へ。伊藤日向守と先陣とす。二陣へ大道寺駿河守。三陣へ松田隼人正。各軍兵五千餘騎とぞ牽ひたり。既ふ富士川の東ふ魚鱗と成して隊伍。大將打集評定しけるへ。斯大軍と緑発し。大河と隔て睨居とも。果しなければ速ふ。川と渡して今川勢と。赴拂ふと先隊ふる。伊藤日向守真魁ふ。馬ふ拍き騎出て。這と看ようすへ續けと。坂東武者のあらひなれば。死生も厭えて經兵急。一度ふ川と敵渡し。今川勢と鏑崩せと。伊藤が軍勢五千餘騎。一雜もせぞ冲駈る。朝比奈備中守これと看て。三千餘騎と二隊とする。身方と眄指揮して曰。五百へ鎗ゆて鞍强ふ喜面目當て駈散よ。殘る五百へ馬ふ離き。敵と待得て鏑を。右の千騎と左の千騎へ。合響と待て堤陰より。先鉄炮と打うけよ。

駿州
富士川の
合戦
朝比奈藤次
先陣して
伊藤日向守を
砕崩す

敵の色合よき程ゝ。箭節間作て射駈べゝと。心静ゝ指揮と傳隊伍と堅固て鎮り待。日向守が五千の兵士。齊く川と渡るやいなや。鯨音とこゝそ今川の。先陣真當て鏑駈る。備中守が五百の歩兵。陣門颯と推開き。面も振らも鎗芒そろく。亟二亟三ゝ搦られ。伊藤が魁隊の馬兵俑。竪足取次ゝ色めく慶。其を見沈して朝比奈備中守。時分はよと合鄉曹の誓。鏻く戛哩と响らも程こそ。左右の埋兵一途ゝ発起。四五百挺の鉄炮と。筒前聯て打うちけ。煙の下より精兵の。弓伍と續て雨霰。隙際もなく射させしゝ。伊藤が軍兵不意と打ま。一足半進持得も。川涯當して敗走せり

藤吉郎高吉初戦打伊藤屬救主危急

豪傑よく百方の敵と防ぐべけれと。千騎の自方が敗走と。推て留むる術なく有繋の伊藤日向守も。偖崩ゝ川縁まで。懐まも馬と退去らせけるが。這ゝ自方の瀰ゝん緯と。心労く懐ひけれべ。踏止まりて大音揚。爭相蓬ゝ我隊の兵俑。敵ハ自方ゝ較ぶれべ。多寡の紅さる小勢なるぞ。先馬強の勇士俑。正魁ゝ進て駈倒せ。敵の方へ背と向てゝ。後指とさゝそ。恥と知るや笑ゝる。返せ〳〵と采施も。振切たりゝ下知もれべ。這一言ゝ烈へきれ。伊藤が兵士一千餘騎。駒の足掻と立整し。取て返して朝比奈が。五百の人馬を駈囲も。朝比奈方の兵輩。勢微なけれべ如何でう敵せん。暮び後へ跳跳されて。右往左往ゝなると看て。朝比奈備中守声烈き。敵ゝ欲自方の挙止。命惜むゝ武士ならぬぞ。高名なきと思ゝ。我ゝ

續けと一喝喚き。風と起して伊藤と目當。騫真地ゑ駈すゝむ。五百の兵士心と励まし。噫大將ゑ先掐を。ゑゑ面目ゑ活長ん。死ねや死ねやと異口同音。呼び喚きて五百餘騎。沸潮破山の勢ひゑ。正黒ゑ成て冲投さう。厥と見るより備中守が。左右の二千騎一隊ゑ成て縱横無碍ゑ揉ぶゝ。伊藤が軍兵今ハ既一鎗半戟遮へも せず。崩起さる自方とゝ。日向守ハ鬣斷とゝ退ゑ退ゑとゝ紛まれども。耳ゑも更ゑ吭入ず。脚より頭と先ゑゑ。他と起てどひき退く。伊藤も方僅ハ詫と謂。川岸隔て躊止り。一戰して在らちゑ。敵も自兵も東西へ。退さうゝゝ絶ゑ安途ゝ。心静ゑ退そんと。自兵の渡る川の瀬の。浅深と見て要時が程。塀の陰ゑ勒さう。此時中村高吉ハ。松下が陣ゑ在つるが。長則親児ハ後陣ゑる。ゑ荷馱の奉行さうゝゝ厥家の兵士一人も。出戰する綜を許されも。是ぐるゑ藤吉郎。心と涸りいるゑもて。先隊ゑ加さう。一揮きゝ。高名せずやと思へども。松下父子が隊相嚴重ゑゝく隙子ゑけまべ。雜り出べきやゝ。那何ハ做んと思案のうち。急度工夫の出さうゝゝくべ。情と興炊場ゑ奔往。飯箭持て陣頭へ。駈放ゝく高声ゑ。東の陣の兵糧さう。齎参るぞと呼りゑぐら。松下が陣と出るやいなや。箭と傍遑ゑ投舍て。翔が如くゑ戰場へ。走往見れば早既ゑ。北條方ハ崩起。我後もと冨士川と。浮つ沈さう退く相ゑり。藤吉郎ハ心ゑ工夫ゝ。濃陰ゑ躯ゑて覗さう。此上ゑき功名誉柄も成さんと。獨笑つ堤の陰の。花盛ゑる柳が下ゑ。躯居さうゝ心の賢作。今日初陣の藤吉が。闘戰の相摸を

見破る。退口と待て敵んとす。實に凡人にあらざりけり。頃ん如月央に。草樹と共に生栄放も。春の雪浦の水僧まるる。河風颯と吹伝に。麹の塵とも見作る。柳の花の紛くと。散くる鎧の袖。打拂ひて堤の上と。瞳定るに観連せば。是や名に負へ勇士と見えて。紺糸威の大鎧に。騎る馬の紫驪さに。肥くしく看えて巍しき。大将一騎鎮くと。堤と東へ向と倚。これは伊藤日向守。敗るに自兵と悉く。静に先へ落し遣。倘朝比奈が這ぶ。遅来らば厳馳して。當痛く戦做んものと。堤の堆丘に突立騰り。後時顧して勒る。然ると朝比奈泰次は軍に錬る勇将なれば。既十分に自方は贏る。長対なれば退失んを凱歌揚て退返る。北條方は虎口と遁る這際に

川と渡らんと怖足らるる騎武むを。北方の岸に勒し二陣。伊藤が勢と救えんと。河の央へ騎武しが。慌忙く伊藤が兵に。推返されて懐ぬるも。亦北岸へ退返る。徒る混雑に藤吉は。敗に成る兵士が中へ早賢廻捉混雑しあるら。日向守に指して。這り河梢三丁程往て。水面濶き渡口あり。水底平に浅端る。増ては敵も在ざれば。速く那瀬と渡しぬ。あれ〳〵柳の五六株。岸と素して生る辺をと。声高らに叫ると。伊藤實にもと心得て。従者二三人引供し。堤續路に川末へ。三丁許歩せば。試浅深させんと三人の従者と河間へ投るが。時分いよと藤吉郎。篁叢の中と竇う往。日向守が虚と窺ひ。騎る馬の太腹と。鑓さ〳〵舒て馬殺と鏑に。馬は駭き騨揚れば。騎持られぬ鞍共に。地鳴き高く撻と墮。

藤吉郎初戰ゐ
冨士川の退口を
窺ふて伊藤
日向守を擊

藤吉郎は駈倚ながら。鎗投棄つ即碩み。両脚搔て斬僵し。即時伊藤と執て擁へ。鎧の隙虚と鏑徹まる。伊藤はきとする豪傑なれば。蒙瘢ながらも高吉が。腕搔摑を刎飜し。漸く下みなさんれども。落馬せし胸太刀小刀の。四五間那方み脱零て。打べき刃のなく近み無ければ。拳と握てもがきなが。孰誰なれば大膽みも。我と硬みて落馬はさせじぞ。姓名唱れと罵ると。藤吉郎は鼻頭笑。我と毆んと做る敵なり。命と惜まば首揖せと。不敵の詞み日向守増く怒て力と究り。拗殺して呑んまと。壓掩らんと為す。卻合。藤吉郎は利足揚て。日向守が臀と。礙と蹴なが身と退ば。伊藤は前へ俯伏み。喉仆と得ずと起揚り。終み首とぞ毆墮せり。現目覚や。今天初陣の功名と。萬夫も怖る日向守が首と毆ず攘き。山王擁護の英雄みして。和光の人ぞ紛られる。那方は亦端蹤の老黨。門の中流み在けるが。這體と見て驚顛み。三人齊く取て返し。藤吉郎と遁さじと。前後み罩て闘ずり。恁て松下が陣中みん。藤吉郎が兵糧と。擔出して晌経れども。帰らざるこそ戦場へ潜魂みて打果やせん。不辨の徒と嘉兵衛之綱。伴還らんと思草騎。堤の這地へ恥看見ども。藤吉郎は三人と。前後み承て大水みず。趕つ越しの戦み這方。之綱鏑と綽整し。敵一人と鏑伏がれば。藤吉郎も踏趺く。二人の敵と斬損し。伊藤が首と取出し。嘉兵衛之綱み見せけるみそ。靳ずでみ感嘆み。始終と吟て獻猪進。先参大將の實撿み。備んめと打伴起本陣へこそ退返も。然程み今門治部大輔義元は。魁隊の軍勝利と得つ

敵敗北と聞しかば。最涯りなく悦驍と。朝比奈備中守泰次が軍功と賞美しける處へ。松下嘉兵衛之綱参向なり。伊藤が首と實撿ふ備ん緯と言條しければ。義元之綱と召近づけ。緯の子細と問ふ隨ひ。中村藤吉郎高吉が。伊藤と敵する始終。毛髪落なく稟舒る。大將義元きこしめられ。愕入く甘心しまひ。伊東いて得の名將なると。容易敵しん無双の調功。如何なる者ぞ藤吉と。呼出せとの課せと承。藤吉郎と伴ひ。義元の門前に出。高吉ハ之綱が座しる末ふ平伏す。義元間遠ふ藤吉が。容貌異ふして材綾く。手と擒しるかぎも。なき相ふ見えけるゆへ。義元これと大ふ冊り。心中殊ふ疑ひとのへども。有係ハ尾張郡ふ主る公。詞と飾りて稱讃もらく。誠ふ武士ハ智と勇とふ。長うもぞんじあるべくうらん。渠ハ貌さく材綾く。面相悪も猿ふ似る。然ども関外無双の勇士伊藤日向守と撃捉しん。是唯智謀と勇氣ふ在り。未頼りき壮士うる。能し扶助と加へしと。稱美の詞ふ。指る褒禄もふうこけり。

嘉兵衛も面目と施して。機會ふけれと進出。且二の軍成ふん。魁軍と命ず。望義元是と許され。飯尾が陣ふ加へう。然るふ朝比奈泰次ハ。初度の軍ふ打勝しうとも。其隙の兵士疲ましれば。暫く休息せしそ。二の合戦と飯尾ふ讓り當身ハ二陣ふ隊伍う。茲ふ北條氏康ハ。味方の先陣打破れ。日向守さ敗とうと。聞より大ふ憤怒す。自門と押渉り。戰ふぐしと敦圍く。正魁ふ馬と進めう。老臣倆劇走倚。轡面ふ執延ず。諫めう宥めう駐とも。聞用ひずして声烈し。急げりそげと

下知しければ。二陣の大将大道寺駿河守。間宮豊後守一隊に成り。即時に門を推破し。七千餘騎の剛兵と。魚鱗に纏ひて今川の。魁軍隊伍へ冲駈る。爰に間宮豊後守好高が。手力部の小掌に伊藤矢柳と云ふ者あり。既に敵に日向守が甥なり。叔父の弔戦して。亡き魂を慰めんと。正魁に進で戦ける。原来武勇に勝れ。今遣の軍に唯我身に。開る恥辱を武士として。やすく雪ぐを退くべきと。自己と烈む突戦に。敵二騎まで掬堕し。四方と拂て立つる勢威に。近づく兵もなき機會なり。松下嘉兵衛之綱は。厥と覩るより鎗引提整し。馬を飛せて矢柳に近倚。号呼掛て掬発す鎗。双方とも鎗術の。誉を得たる勇士と勇士。縛扱鋭く亘合。陽に掬べ陰に拂ひ。一乾一坤委と〻天合地用に隙あらせぬ。阿と進む声は山に响け。吽と退く音は石に響き。巍々たる猛くして。胸板鎬んと闘む。槍の尖頭は黒雲と。霰と破り雨霧が。闇夜を走るに異ならず。鎗尖拂ふ疾相は。巌うち返す荒濤が。月影砕くに髪鬣なり。面も振らず精半晌息さえ沈が戦ひしが。伊東が鎌鍵松下が。鎧の発まに引懸ると矢柳は獲ずと力を烈まし。掛傷さんと傲ると。嘉兵衛焦つく外さんと。されども毛引の鎧に。心の侭に掃得ず。殆虎に異なる處へ中村高吉走侍。伊東が鎗の真中を。丁と二段に破放て。旗を寃めて引る矢柳。臀居に撞と仆まるから太刀ひきぬ脱んとする隙は遅く。藤吉郎は逸疾く。太刀鋭そぶるく伊藤が脇肚鞆も徹まと刺すける。痛瘢に堪兀仆て慶と松下

藤吉郎の
智勇
主人
加兵衛の
危急を
救ふ

馬より跳て下。矢彌が首を掻切て力ふ貫きさ〻揚〻らぶ。今川方ハ衆声あげ。楯と敵て讃〻りける。北條方ハ是と見て。甚鋭氣と堅きをとの〻ども。間宮ハ更ふ異ともせぢ。士卒と励まし〻戰ひ〻ぶ其日も酉ふ幾きければ。双方遁ふ軍と退揚。勝負ハ明日決せんと亀代〻てぞ退陣せと。

今川北條於富士野和睦 屬藤吉発志

這ふ甲州武田の勇士。山縣三郎兵衛尉昌景。山本勘助入道道鬼齋。晴幸ハ今川北條両家より。甲陽武田信玄へ加勢の支と謂投けれぢ。使者ふ應じて出陣ふ〻。三千餘騎と引卒して江尻の驛ふ陣と張。是ぢを両家へ援兵せぎる。其趣と尋るふ。原来甲斐の武田信玄思慮最深き大將ふるとぶ。山縣山本ふ人數と添駿州江尻へ出陣さぢ。両家合戰の號蹊とうぶひ。塩合ふき頃利と解て。和睦させとと〻辞〻ぶ。時分やあると後程とぢ。今天まで日さへ暮ぢね間ふ。今川北條の両軍勢。双方相引ふ退さ〻らぶ。和睦の時ハ今ふりと。山本勘助晴幸ハ。北條氏康の陣ふ赴き。山縣三郎兵衛昌景ハ。今川の陣ふ参〻る。斯て山本勘助ハ。陣燎と點ぞる頃。禮服整して本陣ふる。大將氏康ふ對面し。主人信玄懇切ふ。稟越さるその詞材ハ。這遭甲府へ加勢のよ〻。課超さ〻く使者ふよ〻く。主人自身軍と奉ひ。出陣まぐき該るれども。預て有ろ〻しやさる〻如く。武田今川両家の義ハ久しき親族ふる〻ふ。信玄の父信虎煒ハ。義元ぢ許ふ住く。厚く〻抱と蒙る。然まれぢ信玄。今川家ふ敵もるとと。父ふ

向ひて。うと引み異ゐらむ。而ハあれども當家より。頼くと請て出陣せむんバ。臆まるみ侶て。外聞よろしからぬ。是ぞ多ふ人數と牽ひ。出張ハ為つれども。熟思案と繞らまふ。這遭両家の合戦ハ最無名の軍ゐして。實み益なき闘ひなり。是と以て信玄より。料簡と稟容てハ。汗も北條家と。今川氏ハ。快より一家の好ありて。世の俗諺ゐる所なり。然るを近来説者の爲ゐや。斯樹猶ゐハ賢なれ。さらん欲ム吉精〳〵承りさ〳〵。倘亦當家の勢剛く。関八州と軍隨〳〵威風ゐ靡くがゆゑさゐ。関より西とも砕取らんの。清所存なくバ道なくゐ。不義の軍と出をみ似くり。斯稟さゐ憚多くハ。清祖父早雲寺殿ゐハ。今川氏親の許み在ゐひ。厚き恩澤のミなるを。兵士と借て相互と砕取り。運と開うせゐひ〳〵緯ハ。三歳の児も能知るり。厥

清子孫ゐ在ゐら。不義の軍と発されハ。武士の為ゐ不ぎ緯なるむや。斯る結構〳〵ゐ。執ゐハ援兵〳〵ゐ。現不義ゐ道の軍ゐ名ゐや。さ〳〵ゐ強き當家の陣隊二度まで敗走〳〵ゐのこと。名ある勇士も殿まてハ。先速ゐ清和睦あることを。諦ハ為ふゐられ。主人の存念斯〳〵せバとて。曽て今川と見負まるるを。無名の軍ゐ兵士と損ひ。名と折他ゐ咲ることと。朽憾ゐハらハぎや。快今川へも和談の緯。山縣と以て謂入れんバ。義元ゐ異義ハ稟まゐ。當家の清父子事と好まれ。此義ゐ隨ひるをんバ。主人ゐ是非なく道理ゐ属。今川義元が勢と援、有ゐの勝負と決まゐ。倘亦清當家清和談あらんを。義元違背ゐるをハ。當家ゐ助勢〳〵今川家と。左右なく馬蹄ゐ駈散さんゐ。ゐれなりとも清當

家の返書次第信玄ゆも心を決して了簡をゆ。所應詞承和つゝ
まゝりて。すでも憚る気色なく。稟容きゝ北條氏康。案ゆ相
違いしゆるも。勘助晴幸ゞゆ。もゝ滝。こゝム理ゆ中りぬれば。何と
會へん辞もなく。夜曉るまでゆ返書をゝと。起んとすると勘助
かゝりて。北條今川武田の三家。安危存亡なる弾ゆ。唯所詮返答の
次第ゆあり。克く所賢慮あれゝと。今宵ハ山本晴幸も。北條
の陣ゆ止宿せり。又氏康ハ夕深るまで。諸將と聚て評議し
けるゆ。只今川の一家さへ。剛敵ゆして驚き匹きゆ。增て武田の勢
加らば。勝利を得ん弾難くらん。和議こそ萬全なるべしと。評
議一決なりけるゆぞ。勘助入道と莽び招き。和睦承引せゝ譯と。
誓紙ゆ記して返答せり。入道晴幸左右なく喜び。聖を告て

執て返し。今川の陣ゆ走きけり。偖義元の陣中ゆ。山縣三郎兵衛
昌景。和談の綜と謂授けるゆ。義元快く是と諾ひ。三郎兵衛と
饗應とりうら。山本勘助も茲ゆ来り。氏康が返答の次第と舒。早
速這等の準備と調へ。翌日両家富慈野ゆおゝく。和睦の對面
ありけるが。山本山縣這と斟酌。以後隔心と相加へも。遍ゆ救ひ合
べき旨。盟約なりて和儀そのひ。北條父子ハ軍と纏め。小田原城へ
帰陣しられば。義元もまた府中へ退馬し。武田の両士と厚く歓待。
深く謝して還されける。然るゆ今川義元ハ。這遭の軍和議して。
戦能ぞとりて雖。日向矢輔の二雄と打捉。自方充分贏ありとて。
喜悦の剰り酒宴と催し。諸士と犒ひ功と賞美し。恩と賜る中ゆ
就て。松平嘉兵衛尉之綱へ。初度の軍の功名ゆ。伊藤日向守と

信玄の中策
今川北条を
省く富士野の
和議を辨ず

うち取。二の合戦の誉柄あり。伊藤矢補と戸一緯。自軍第一の功あり。且は今川家の威風とりく。関東へ聞こえさせんとて。五百貫と加増せらる。是貪藤吉郎高吉が。功労あてありぬれども。陪臣の身なるとゆえ。主人松下ゆゑ賜賞ありて。高吉あは沈沈あり。然るゆゑ中村高吉は。和睦と熟談機會ゆつけ。甲府の両士と窺ゆゑ。武田の軍師山本入道道鬼齋は。材綾しと越跋さり。まして眼は一片瞽さり。山縣三郎兵衛昌景は。大材なれども鬼口あり。武田ゆこれらの勇士あること。見ぬ今天まで鬼神より。猶猛くらんと思ひしが。意笑止あり躰具さらむ。然まれば我は綾生ゆて。顔色猿ゆ像さうとも。五體ゆ闕くる所なければ。よも勘助ゆは劣るまじ。先這上は智と磨琢。天下ゆ美名と裏ろせんと。初て大志を起せり。實天然の名將あり。又ゆ

松下は瞠と貶たり。遠州濱名ゆ遠り加増の緯ぞと悦堪て半月許生ぞ一いるが。這遭藤吉高吉が。ゆ及の擇あり一ゆ係て。ゆ時の加増と得る緯。貪高吉が貶るところ。今日より子とべ。我子の如く懐ふゆれば。松下の氏と貶べし。然して永く縁と結ん。ゆの心い那何ゆぞと。尋ねゆ藤吉ゆと又き。誠ゆ眞加ありぐく。然ども匹夫の某へ。松下の氏と貶る緯。朋輩の所思とりひ。諸人の妬もあるべければ。容易所奉ゆーげく。きゆあれ謀き市芳志ゆて。課下さる所惠と。辞退いくも憚りおれば。小居所存とゆく。承地ゆらべ有げやと。ゆゆ之綱小頭と頭け。所存とりゆ那何ゆる緯ぞ。然侍方僅貶さて。所名氏と在の信ゆ緯領ゆさべ。先ゆ稟も混雑あり。晞くゆ松の字の。偏のく用ひて木下と。氏と革も

かゝーゝ。然まれば公と相並ぶべき。君臣上下の禮ふも稱えん。所詮容ありやと稟もふぞ。之綱路感佩ー。公とりふ字を我ふ戻ー。木のもと取て氏とせんとハ。實ふも萬事ふ缺見なき。真心顯て頼もー。那何ふも子が所存ふ信せん。才子こと誉られければ。是より中村の氏を棄て木下と革めう。嗚呼感ぎぬー嘉兵衛が。松下の氏をもて高吉ふ付ふーつもど。雲路大志の藤吉郎。公を除ひて木とのみ取。巧ふ木下と口料せーハ。實ふ〳〵天下の將ふるべき。神作天然の兆ふ出て。公下ふ屈せぎる證と顯も。木ハ其東ふり春氣ふり。四海を治もる人の始ふ。ぢつ東ど氏ふ立るハ。是登天の真理ふ稱ひ。童名日吉の孫める時。日輪懐裡ふ入ふける。母が夢想の因とゆて果を結べるの方と掌る。それハ理をもて說道ふめれど。再び事ふ付きゝふ

とをんべ。原来藤吉郎高吉ハ木下の氏ふ生れう。父ふりける中村弥助昌吉。織田ふ仕て氏を革め。木下と号りーあれば。今藤吉が即智もて。公と並ぶ意ふりと。挨拶ふ迫びー詞。實ふ奇才と謂つべー。増て大義を企つ高吉。松下ぐきの部下ふいでう屈もる意あらんや。日吉先が其初。ぢ戸ふ来りて武門ふ入ふ東海道ふ。蟠もる今川義元と。名將ふりと思ひける。直動せんとて昨日まで。松下が許ふ留ることの久ふも。其義元まで意ふ稱えべ。這遭富士川の合戦ふ。高吉ふ類の高名せーふば。義元ふ高吉ふ。褒賞賜服ー直奉ふらーむべきと然ハせど見至らぎーて。藤吉郎と奴僕ふりと輕んト賤しめ孤疑の念ありつふ。他の賢愚と知ること能まべ。それふ從ふ嘉兵衛父子が。高吉と推挙もせど。自己が五百貫の奉賞も。藤

吉郎が助帯すると。嘗て是が報ハすべしと。我子ハせんと料理つゝ
者ども謂ん愚ども言ん。然ども從來学問の恩ありぬれバ隔意ハ
なく。松下が家ハ努力しぬれど。蟠龍なんぞ鮮究ハ僂まるの呼謂あら
んや道なき邦ハ日と送り。徒ハ老と迎へんより。他國ハ至りて賢良
の主と撰び。莫太の功と立んあと。既ハ思起しなば。方僅松下の氏と
讓られ。親子の間と結び。大事の秘の妨なりと。遠と慮て承ざり
しを。心屬さる之綱ども。最なるなるぞ思れなる。斯て春尽夏起て。
八月の首旬となりしが。主人之綱の代賽として。秋葉山へ登りける路。
三面大黒天の像と拠得す。濆名ハ歸りて這由と。主人嘉兵衛ハ
譚られば。松下ならると喜びぬ。這福神と信ぎる駒ハ。千人の司となる。
增て三面なりければ。三千人の長ならんハ。急る稜なる信仰せんと。頻ハ

高吉と勧めけれども。敢て信ぎる氣色もなるなき。機會ハ觸時ハ臨
んでハ留る相なければ。主人嘉兵衛之綱。藤吉郎と往まるなく。我
家ハ留居んと工夫し。川村次郎右衛門といふ者の。娘とりて嫁らせ
ん。然ども此女愚鈍ゆて。廉吉郎が顔姿醜きと痛く嫌ひ離れん
辨のを思ひつるが。容易く去づきまぬ隙も無く。心ハ深きを月日と送れり。
明るべ八禄元年ハて。其春二月の甫なりしが。朝比奈備中守泰次。
主人三河の命ゝて。領地の巡見ハ出る次取。松下が家ハ止宿して。
夜分ハ及び茶の友ハ。富士川軍の話しけるが。其節矢蒲が鎌鎗ハ。
鍾と掛て難義の由。なるの駒て預て聞。尾張國の新製鎧それ
らの愁なき指他あり。知りるやと問ハ松下。那何ハも其義ハ聞
つるが。品と見ぎれん得と知らぞ。早速一條の鎧と購め術得ゆ

べ製まゞーと。即時ゝ藤吉と呼出ー。子が國ゝて製ーめる鏡の得の有ると知るや否やと尋ねらふ。藤吉郎ハ問ゝ應ド。それハ普通の桶縁箭より。其品聊異なりれ。右の脇ゝて締緩り屈伸自由ゝせーのそれべ得用多くいて。胴丸と号けうと。答ゝ嘉兵衛ぎ然べとて。黄金六両熟出ー。藤吉郎ゝ授ゝ。不日ゝ尾張へ発行。新製鏡と購来よと。吩咐られて高吉ハ異義なくそれと領兼ー。黄金と受得瞠と告。自宅へ歸りて発足の準備ーつると妻の於格。良人ゝ對ひく謂ける。家夫尾州ゝ行べ。再び這地ゝ還りまド。妾獨がいづくゝ。那日まで待ても甲斐なくらん。睇ゝ伝傳の縁と断。證状と書て賜ひねと。ゝゝ藤吉嘆息ー。肯ゝ誰ゝ謂ゝ聴それど。

諾ゝぞ。只管離縁と望むゝぞ。有係の高吉有剰ー。汝然べゝ瞠とのそまべ。即時ゝ證書と遣もせんが。後ゝ悔ゝも返りいせド。離別の印ゝ貺ゝべき。究竟のあそあれと裏日ゝ据ひー三面の大黒天と取出ー格女ゝ貺へ教て謂ゝ。汝福神と信それべ。三千人の司と為という。汝這后よく祈て。富貴と得よと所もあつぞ否く妾ハ這像ゝ。望を為けれべ家君ゝ三千人の司とも為らう為べ成ゝと。ゝゝふさ、取らで突撲もと。藤吉郎ハ冷笑ひ。大丈夫さる意志。那何でう大黒の力と借らんや。三千人いゝゝも足らぞ。四海の人の頭領と成とも。猶てが所念ハ足ぬうとせぞ。見ゝく壊めてつくれる。這大黒と心中の。ド筮そて誓と云ん。先斯ごと謂ゝゝ庭ゝ居る石盤ゝ。大黒

高吉
濱名茂
辞するゝ臨ゝ
三面の
大黒天を
碎く
大志を
發起

天の像と載せ。大鎚鉈あて括然と擲バ。袋俵いつゝも足らぬ。五體も微塵ゝ碎けり。藤吉郎ハ莞爾と笑ひ。此斯像と祈る胸ハ。一面とゝ一千人の。同とゝ聞らハ。方僅斯微塵ゝ碎し大黒。一欽とゝ一千の。人數とゝて算ゝる胸ハ約日本六十餘州の男女と剰さへ集むるとも。いまゞ足きとゝ思べゝ。我心中ゝ望む所ハ。斯の如しと謂聞けれバ。格女ハ軍きて辞ゝるきを。藤吉郎ハ筆疾ゝ。離縁の證書終り。格女諾ゝ ゝ。曉る卯天。濱名を発旅尾張ゝる。故郷と當て赴きける

龍谷大学

繪本豊臣勲功記初編巻之二終